芹霊と
１００人の元カレ
2

芹霊と１００人の元カレ　２

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20146891

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, ♡喘ぎ, テル霊(別れています)

芹霊前提、師匠総受けです。テル霊（別れています）が含まれます。今回は♡喘ぎがあります。倫理がアレです

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ネタバレ
芹霊は別れません

月が綺麗ですね＝愛しています
手が届かなかったからでは？＝手に入れられなかったからそう思っているだけでは？

芹霊と１００人の元カレ　２

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

「くあ……」
霊幻があくびをしながらメールチェックをしている。
始業時間１時間前の相談所では、いつも通り霊幻が軽く掃除を済ませた後メールチェックをしたりお茶を淹れたりしていた。
が、いつもと違って憑依したエクボと芹沢が早く来ていた。
「ふぁ……」
霊幻は一通りメールに返信して、お茶を一口啜ってから、立ち上がってトイレに消えて行った。
「……おい」
「何」
霊幻に頼まれたチラシ作成をしながら、目を上げずに芹沢がエクボに返事をする。
「俺様を倒したからって調子に乗るなよ！？俺様は元カレ四天王の中では最弱……」
「元カレ四天王って何！？」
「ゆくゆくはお前の前に立ちはだかる……くくく覚悟しとけよ？別れ話の準備をしておくんだなァ！！」
「はあ……もう、訳の分からないこと言わないでよ……」
トイレから戻ってきた霊幻が席について、一旦２人は沈黙した。
「あ、今日は一発目から出張除霊だったわ。じゃあ、芹沢店番頼むな。行くぞ、エクボ」
「おー」
ソファーから立ち上がったエクボがニヤニヤしながら芹沢に耳打ちする。

「俺様を霊幻と２人で行かせていいのかよ？」
「え？」
パソコンから顔を上げて芹沢はきょとんとエクボを見返す。
「エクボくんなら何に変えても霊幻さんを守るんだろうから、安心でしょ？」
そう言われてエクボは虚を突かれる。
「……そうだな」
苦笑してきびすを返した。
「行くぞ、足手纏い」
「失っっっっ礼だな！？」
そう言いながらエクボは、霊幻の肩を抱いて出て行った。
（……）
芹沢はモヤモヤしながらも、自分の作業に戻った。

※

トントン、と入り口のドアがノックされる。
「どうぞ〜」
霊幻が顔を上げると、花沢が入って来た。
（うわ、相変わらず神々しいまでのイケメンだなあ）
芹沢は思わずまじまじと成人してスラッと背の高くなった花沢が、霊幻に無邪気に笑うのを見てしまう。
「新隆さん、こんにちは。課題やっててていいですか？」
今まで花沢はちょくちょく相談所に顔を出していた。
（新隆さん……？）
だが、芹沢は霊幻と付き合い出して、その姿に引っかかるようになってしまった。
（考えすぎかな……）
「あ、そうだ、新隆さん、今日の夜、いつもの料理屋さん行きませんか？クーポンが来たんです」
「おお、いいな！……あ、でも、すまん。恋人に、元カレと２人きりで出かけるなって言われたから……」
（やっぱり元カレだったー！）

芹沢は頭を抱えたくなる。
（元カレ四天王……）
ちら、と芹沢はモデルみたいな立ち居振る舞いの花沢を見る。
（貫禄はあるなぁ……）
「……じゃあ、今カレを呼んで一緒に行きましょうよ。それならいいでしょう？」
花沢の言葉に緊張で芹沢の心臓が跳ねる。
「……えと、芹沢、どうする？」
おずおずと霊幻が芹沢に声をかける。
ゆっっっっっっくりと、笑顔のままの花沢の顔が芹沢の方に向いた。
（怖っっっっっっ！）
芹沢はひきつった愛想笑いを返しながら、時間割を鞄から引っ張りだす。
「えと、今日は３コマなので……少し遅くなりますが、学校の後だったら」
「テルくん、それでいいか？」
「いいですよ」
ワクワクした様子で財布の中身を確認する霊幻に、仕方ないな、と芹沢はため息をついた。

※

「俺ここのごはん大好きなんだよなー」
霊幻はワクワクしながら半個室のテーブル席の奥に座る。その隣に芹沢、向かいに花沢とエクボが座った。
「新隆さん、いつものでいいですよね？芹沢さんとエクボはどうしますか」
芹沢はメニューを見て目を白黒させる。
（た、高……っ！）
夕飯時にも関わらず落ち着いた雰囲気の、本格的な韓国料理店。霊幻が手持ちを確認していた意味を芹沢はやっと理解した。
「あ、俺今日は手持ちあんまり無いから……」
「いいですよ、僕の奢りで。いつもそうじゃないですか。芹沢さん

も、エクボも、ご馳走してあげるよ。僕が誘ったんだし、ね？」
「そういう訳にはいかねぇよ」「お、俺はいいです」「自分の食い扶持ぐらいテメェで何とかするっての」
「……新隆さん、どうして今日は奢らせてくれないんですか？僕のこと嫌いになっちゃった？僕に奢られるなんて怖気が立つ？」
きゅ、と花沢がテーブルにのせていた霊幻の手を握る。
「……っ霊幻さんの分は俺が払います！！」
芹沢は立ち上がって言い切った。
「え、どこ行くんだよ」
「ＡＴＭです！すぐ戻ります！！」

※

「はー、美味かった……っ」
幸せそうに霊幻はふにゃふにゃ顔になる。
「ふふっ、顔に付いてますよ」
花沢が霊幻の頬を指でぬぐう。
（あっ）
ごそごそとティッシュを探していた芹沢の手が止まる。
「かなり美味かったわー。今度行く時も誘えよ」
する、とエクボが霊幻の腰を抱く。
「……っ霊幻さん、今日は俺んち来ますよね！？」
思わず芹沢は叫ぶように言った。
霊幻は振り返ってきょとんとして、
「……分かった。行くわ」
儚げに微笑んだ。
じゃあ、と手を振って芹沢はエクボと花沢と別れる。

アパートまで行って。

「……すみません霊幻さん、先に部屋に入ってて貰っていいですか」
「？分かった」

外階段を上がって、霊幻が部屋に入ったのを確認して。
芹沢は振り向いた。
「何か言いたいことがあるんだね、花沢くん？」
超能力による認識阻害を解除した花沢が暗闇から現れる。
「……どうせ別れるなら、早く別れて欲しいなって思って」
「……」
「今は楽しいですけど、もう既に物足りないでしょう？あの人はそう言う人なんだ。男に飽きられる宿命の人なんだ」
「……」
「ああ、別れたら僕に教えてくださいね。僕、また新隆さんと付き合いたいんです。振ってから、惜しくなっちゃって」
「……」
「聞いてます？」
「聞いてるよ。以上かい？」
「は？」
「じゃあ、俺、霊幻さんを待たせてるから」
「……っ！」
立ち去ろうとした芹沢の足元に光る鞭の先端が刺さる。
「新隆さんと別れてください。今日、今、すぐ！」
「……嫌だと言ったら？」
「力づくで『うん』と言わせます！」
ひゅ、と空鞭が容赦なく芹沢の急所を狙って飛んでくる。
芹沢は後ろに大きく飛んで避けた。
「めちゃくちゃだよ……何言ってるか分かってる？」
「っ、分かって、ますよ！」
花沢が操る空鞭を避けながら芹沢が困ったように眉を寄せる。
「理解できないなあ……」
「何、がっ、ですか！」
「花沢くんは２回も霊幻さんを泣かせたいの？」
「え、っ」
「あんなに、つらくて苦しそうな顔を、好きな人に２回もさせたいなんて」
ふぅ、と芹沢はため息をつく。

「俺には分からないよ」
「……っうるさい、うるさい、うるさい！！」
ずあ、と花沢の身体から超能力が吹き出す。
「えっ自爆！？やめなよこんな街中で！！」
「芹沢さんが再起不能になれば──」
花沢の正気を失った目が芹沢の後ろを見つめる。
「きっと新隆さんは、僕とまた関係を持ってくれる──！」
「……っ！」
芹沢は花沢から吹き出す風を腕で防ぎながら、顔を歪める。
「……ごめん、花沢くん」
ゴミ出しされていた瓶を踏み砕いて。
そのカケラに芹沢は超能力をのせる。
「俺、手加減とか苦手なんだ」
浮かび上がったガラス片が、びゅお、と花沢に殺到する。
「く……っ！」
慌てて花沢が貼ったバリアを瞬時に貫通して。
「あ」
花沢の目前で無数のガラス片がキラキラと襲い掛かろうとしていた。
「っテルくん！！」
が、すんでのところで霊幻が花沢にタックルして回避させた。
「なっっっっっっにやってんだよ２人とも！！なんでこーなった！？」
庇うように霊幻に抱きしめられた花沢は、くしゃりと顔を歪めて縋り付く。
「新隆さん、新隆さん……愛しています。どうか戻ってきて……っ！」
「どうしたんだよ、テルくん。何か悩み事か？また事務所に来てくれたら相談にくらいのるぜ」
「違うんです、あなたが好きなんです……！」
ははっ、と霊幻は笑って。
「嘘付いたって駄目だぜ、ヤらせねぇよ」
残酷にあしらった。

「あ……あ……」
よろよろと花沢は立ち上がって、青い顔を隠すように後ずさる。
「あ、帰んのか？夜道気をつけろよ！」
「……はい……」
ふらふらと、しかし足早に花沢は立ち去る。
芹沢はガラス片を片付けてから部屋に入ろうとしたが、どうにも気になってきびすを返す。
「すみません、俺、一応、様子を見てきます。部屋で待っててください」
「ん、頼むわ」
芹沢は足早に駅の方に向かう。
途中の公園で、目立つ金髪がぼうっとベンチに座って街灯を見ていた。
「……風邪引くよ」
「芹沢さん」
「……何？」
ブゥン、と何処からか自販機の音がする。
「出来れば新隆さんを泣かせないでくれませんか」
「え？」
「言われてみれば、そうだなあ、って。僕はもう、新隆さんの泣き顔は見たくないなあ、って思いまして」
立ち上がって花沢はお尻の砂埃をはたく。
「まあ、出来るなら、ですけど」
綺麗に花沢は笑う。イケメンの威嚇笑いは迫力があった。
「……俺がどうこう出来ることじゃ無いよ。俺は霊幻さんから別れを切り出されたら、きっと断れないから」
花沢は肩をすくめる。
「……芹沢さん、これ捨てておいてくれませんか」
すれ違いざまに、花沢は芹沢に綺麗にラッピングされた何かを押し付ける。
「じゃあ、さよなら」
花沢が駅に向かうのを見届けてから、芹沢は包みを開ける。
（ペンダント……）

それは羽根の形のペンダントトップが２つ付いた、銀細工の首飾りだった。
（超能力が込められてる。念じれば、ちょっとしたバリアなら張れそうだ）
くる、と羽根の飾りをひっくり返して、芹沢は胸が締め付けられる。

１枚には、霊幻の名前が彫られていて。
もう１枚には、花沢の名前と、電話番号が彫られていた。

（捨てられないよ……）
霊幻が受け取らなかった花沢の気持ちを、芹沢はゴミ箱には捨てられなかった。

※

「おかえり。テルくん様子がおかしかったけど、大丈夫だった？」
「ええ、大丈夫でしたよ」
「そっか」
するすると霊幻は芹沢のスーツを脱がせる。
自分のスーツのポケットに手を突っ込んで、霊幻は息を飲む。
「嘘だろ、ゴム忘れてきた……！っごめん芹沢、すぐ買ってくるから……！！」
駆け出そうとした霊幻の手首をパシッと軽く芹沢は掴む。
「俺、霊幻さんと一緒に買い物行きたいです」
ほにゃ、と芹沢は笑う。
「……駄目ですか？」
「駄目、じゃ、ねぇけど……」
「はい」
口ごもる霊幻を芹沢はそっと待つ。
「……怒ってねえの？」
「え？今怒るところありました？？」
ほ、と霊幻の肩がゆるむ。

「……行こっか」
「はい」
芹沢はベッドから半纏を取って着る。
アパートを出て、２人は並んで歩き出した。
「冬は空が高いですね……」
は、と吐き出した息が白く残る。
「……そうだな」
星明かりが照らす、コンビニへの路。
す、と芹沢は手を霊幻に差し出す。
「良かったら手を繋ぎませんか」
「……いいの？」
「おかしな人だなぁ。俺からお願いしたのに」
霊幻ははにかんで芹沢の手をそっと触る。芹沢もそっと手を触れ合わせた。
「あの、霊幻さん」
「ん？」
「出来たらでいいんですけど……元カレに身体触らせるの、やめてもらえませんか……？」
芹沢の喉が緊張に渇く。
（束縛、嫌だって、思われるかな）
「ごめん、気付かなかった。俺そんなに元カレに触らせてた？」
「めっちゃ触られてます」
「うわー……ヤだったよな、ごめんな。今度から気を付けるわ」
「いやその、やめてくれるのなら、それで……」
芹沢は何かが胸に引っかかる。
が、それが何かは分からなかった。
「……わあ、お月さんが綺麗ですね」
朧月に虹の傘がかかっているのを見て、芹沢が無邪気に喜ぶ。
「！！……手が届かなかったからかな」
「そうかもしれませんねー。あ、コンビニ着きましたよ」
芹沢はこの時も、霊幻がどんな顔をしていたのか、よく見ていなかった。

※

「ん……」
股間に顔をうずめて芹沢の性器をしゃぶる霊幻に、芹沢は頭が熱に浮かされたようにぼうっとする。
「夢みたいだ……」
「ン、ッ」
霊幻は目を細めてきゅうっと喉を鳴らす。
「う、っ」
その刺激にあらがわず、芹沢は霊幻の口の中に精液を吐き出した。
「うわっ、すみません、また口の中にッ」
芹沢はティッシュをつかんで霊幻に渡す。
「出してくださいッ！」
「ん？んあ……っ」
霊幻は両手でティッシュをおしいただき、見せつけるようにダラリと舌から白濁を垂れさせた。
（エッチだ……っ）
ごくりと芹沢の喉が鳴る。
「……これでいい？」
「あっ、はい」
霊幻は芹沢の膝に乗り上げ、くるくるとゴムをつける。
ずぷ、と後ろで飲み込んだ。
「あっ♡♡♡すごいっ♡♡♡」
芹沢は、ぱじゅぱじゅと腰を振る霊幻の、乳首に触れる。
「んっぁ……！」
ビクンと跳ねた霊幻の膝が止まった。
「えっ何……！？別にそんなサービスしなくてもいいぞ！？」
「霊幻さん」
芹沢は上半身を起こす。
「んぅ……っ」
挿入角度が変わってぐりっと内部をえぐられた霊幻が悩ましげに眉をひそめた。
「俺も霊幻さんに触れたい」

「ひ、ぁっ！」
くちゅっと大きなごつごつした手に性器を握られて、腰に走った痺れに霊幻は嬌声を上げる。
「あ、んぁっ、こえ、でちゃう、からあっ！」
乳首をいじりながら性器をしごかれて、ひく、ひくと霊幻の背が震える。
「聞かせて下さい。すごく……エッチだ」
耳元で熱っぽく囁かれて、ぶるりと霊幻は鳥肌を立たせた。
「こしもッ……っあ、うまく、振れない……ッ」
がくがくと震える膝が上手く立たない。ぐちゅ、くちゃ、と不規則な水音が響いた。
「それはそれで興奮します……ッ」
芹沢は自分の怒張がドクドクと脈打ってるのを感じる。
「あ、あ！もう……ッ！」
霊幻の睫毛が揺れて光をキラキラと跳ね返す。
「イってください」
ぐり、と芹沢は霊幻の性器の先端をこねた。
「ぁ———っ……！」
ドロドロと霊幻は精液をこぼす。腹の中に大きなものが入っているから精管が潰されていて、勢いよく射精できないのだ。
「俺も……っ」
ぶるりと芹沢も絶頂感を味わう。身体から熱が抜ける感覚に心地よく浸った。
「ごめ、手、汚した」
「ああ、……」
ペロ、と芹沢は手についた霊幻の精液を舐める。ぴゃっと霊幻が真っ赤になった。
「不思議だなあ、マズイのに美味しい気がする」
「……っ、……っ、そんなもの、舐めるなよ……！」
霊幻が慌てて芹沢の手をティッシュで拭く。
「ええ？霊幻さんも俺の舐めるのに？」
「俺は！」
霊幻はふ、と目を逸らす。

「……俺はいいんだよ……」
「？」
「ほら、風呂入ってこいよ」
「霊幻さんが先に入っていいですよ。タオル風呂の前に積んでるやつ使って貰っていいですから」
「……分かった」
さあ、とシャワーの音が響き始めて、芹沢は悶々とする。
（一緒に入りたい……）
それにはこのアパートの風呂場は狭すぎた。
（霊幻さん泊まっていって欲しいけど……寝る場所が無いんだよなぁ……）
もっと広い部屋、と考えて芹沢は通帳の残高を思い出す。
（足りない……）
今日、美味しいものを頬張っている霊幻は可愛かった。もっと幸せそうな顔をさせたい。色んなところにデートにも連れて行きたい。それから、それから、色々。
芹沢は思い浮かべたものに、全てお金が絡んでいることに悩む。
「上がったぞ」
「あ、じゃあ俺が風呂から出たら駅まで送って行くんで、待っててください」
「ええ、そんなのいいのに……」
「絶対待っててくださいよ」

駅までの道を一緒に歩いて。

「じゃあ、また明日」

駅の中に消えていく霊幻にとてつもない寂しさを感じる。
（一緒に住みたい。毎日おやすみって言いたい）
急いで芹沢はアパートに戻る。
「……もしもし、ヨシフさんに繋いでもらっていいですか。芹沢克也です。危険度Ａクラスの超能力者です」
しばらく経って。

「ヨシフさんですか。芹沢です。ご無沙汰してます。あの……やっぱり自衛隊の実験体の話、受けようと思います」
「……え？実験体じゃなくて被験体？すみません違いが分からないです」
「報酬は前、言ってた額、貰えるんですよね？」
芹沢はぎゅっとスマホを握り直した。

※

翌日。
「新隆さん、今度はタイ料理とかどうですか？」
「まあそんな気は！！してたけども！！」
にこにこと笑いながら花沢が霊幻に話しかけている。
霊幻が施術室に入った隙に。
「はぁー、元カレ四天王ってことはあと２人か……」
「え？僕は元カレ四天王じゃないですよ」
「え？」
「僕はただの元カレ連合の構成員です」
「元カレ連合って何！？！？」
「四天王ほど強くはないです。芹沢さん良くエクボ倒せましたね」
「いやエクボくんとは……話しかしてないから……」
「ふうん」
花沢は唇に指を当てる。
「運が良かったかもしれませんね。エクボ、めちゃくちゃ厄介ですから」
はは、と芹沢は引きつった笑いを浮かべた。
施術室から出てきた霊幻が微笑むのに、微笑み返しつつ。

続